他人の痛み

星　野　　徹*

ウィトゲンシュタインは、他人の痛みを自分自身の痛みをモデルとして想像しなくてはならないとすると、それはそれほど容易なことではないと言う。自分の感じている痛みにしたがって、自分の感じていない痛みを想像しなければならないからである（『哲学探究』、302）。他人が腹痛に苦しんでいる状況を想像しようと試みても、痛みというものの原型が、自分自身が感じている痛みであるならば、それは他人が腹部に痛みを感じていることの想像ではなくて、自分自身が他人の腹部に痛みを感じていることの想像になってしまうだろう。そして、自分の痛みをモデルとする以外に、どのような仕方で他人の痛みを想像することができるというのだろうか。

友人が頬を押さえて「昨夜から親知らずが痛くて」とこぼしたとしよう。私は、昔、自分の親知らずが虫歯になったときに私が感じた痛みと同様の痛みを彼も昨夜から感じているのだ、と思うことだろう。しかし、ウィトゲンシュタイン的な人々によれば、そのとき、私は友人の歯痛を想像しているのではなく、私の歯痛を想像しているのである。

他人の痛みを想像することができないのは、われわれの想像力が貧しいからではない。「痛み」という言葉の意味からしてそうなのである。私は「痛み」の意味を、私の痛みの感覚を通して学んだのであるから、痛みとはこの私に感じられるものであるということは痛み概念の本質に属することなのであり、他人に痛みが生じるなどということはそもそもありえない話なのである。

痛みだけではない。たとえば大森荘蔵は、「考える」「感じる」「見る」「聞く」「愛する」などのような心の働きを述べる動詞を「コギト動詞」と名付けたうえで、他人のコギト体験は私とは全く絶縁されているゆえ、他人称にコギト動詞が付いた命題はすべてが意味不明であると言う。他我問題とは、「他人に意識があるというのは本当のことだろうか」といった真偽の問題ではなく、「他人が痛んでいる」や「他人が見ている」といった表現がそもそも意味を持ちうるのか否かといった意味の問題なのである（大森、1992、162～163 頁）。

ポストの色は、私には、他の人たちが木の葉を見ているときに木の葉の色が他の人たちに現われるような現れ方をしているのかもしれない。私と他人では赤の見え方と緑の見え方が反転しているのかもしれない。また、世界中で心を持つのは私だけなのかもしれない。他の人たちは私と同じように行動しているものの、中身は空っぽで、思考も感情も、痛みもかゆみも、視覚体験も聴覚体験も生じていないのかもしれない。このようなスペクトラムの反転やゾンビの存在の可能性についてならば、哲学に縁のない人々にもあるいは思い及ぶかもしれない。何と言っても他人の意識状態を私が直接知ることはできないのだから。

私の友人が歯痛を感じているのかどうか、本当のところ私にはわからない。彼は痛みを装っているのかもしれないし、彼はゾンビなのかもしれない。しかし、ウィトゲンシュタイン・大森流の他我問題の問題性を理解できる人が果たしてどれだけいるだろうか。「彼の親知らずには、

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授　哲学

私が以前親知らずが虫歯になったときに感じた痛みと同じような痛みが生じているのだ」という思いのいったいどこが意味不明なのだろうか。ウィトゲンシュタイン・大森流の他我問題はどこから生じてきたのだろうか。

Ⅰ　痛みを想像する

私は友人と海辺にいる。友人は海を見ているが、私は砂浜に寝そべって空を見ている。空を見ながら、私は友人が見ている海の風景を思い浮かべてみる。そのとき私が思い浮かべているのは、友人に見えている海の風景ではなくて、あくまでも私に見えている海の風景でしかないと大森は言うのだろうか。確かに、スペクトラムの反転の可能性は排除できないのだから、海が、私が思い浮かべている通りに友人に見えているとは限らないのだろう。また、私の視覚的想像は、私自身の視覚体験を素材としていることも事実だろう。しかし、私はこの私ではなく、隣にいる友人が見ている海の風景を思い浮かべているのである。

今度は、私は、友人に見えている海の風景ではなく、起き上がったときに私に見えるであろう海の風景を思い浮かべてみる。私は先程と何か違ったことを行っているのだろうか。二つの想像内容に違いはあるだろうか。そのようなものはありはしない。友人に見えている風景を想像するときも、私が姿勢を変えたときに私に見えるであろう風景を想像するときも、私は同じことを行っているのであり、同じものを想像しているのである。

私は雪を頂いた富士山を思い浮かべてみることができる。その像に、大阪方面へ向かう新幹線の像を加えてみることもできる。そのとき、私は、富士山を、私に見られたものとして想像しているわけではないし、私に見える富士山像を細密化しているわけでもない。私は、ただ、富士山の姿を思い浮かべているだけであり、富士山と富士山の手前を走る新幹線を思い浮かべているだけである。視覚体験には、それは私によって見られているということが常に伴っているのかもしれないし、想像についてもそうかもしれない。視覚風景の想像にはいつでも、この私によって想像されているということが付き纏っているのかもしれない。しかし、視覚風景を想像しているのはこの私であるが、想像された視覚風景は、私に見えているのでも、他人に見えているのでもない。想像された視覚風景は、誰のものでもない、そして、誰のものでもありうる視覚風景である。

聴覚像の想像も同様である。私は、ブラームスの第4交響曲の冒頭部分を思い浮かべてみることができる。さらに、フルトヴェングラーによる演奏を思い浮かべ、次に、カルロス・クライバーによる演奏を思い浮かべてみることもできる。私は、私に聞こえてきたブラームスの第4交響曲を思い浮かべているのではない。単に、ブラームスの第4交響曲の冒頭部分の聴覚像を思い浮かべているだけであり、より集中力を高めることによって、フルトヴェングラーによる演奏とカルロス・クライバーによる演奏の聴覚像を思い浮かべ分けているだけである。想像された聴覚風景はやはり誰のものでもない風景である。

しかし、味覚像の想像となると事情は異なってくる。レモンをかじっている人の味覚体験を想像してみよう。他人の酸っぱさの体験を想像しようとしても、私には、どうしても私の口の中に酸っぱさの感覚が広がって行く様子を想像することしかできない。他人の口の中に酸っぱさの感覚が広がって行く様を私は想像することができないのである。確かに、レモンをかじっている人を見れば、私は思わず口をすぼめてし

まうし、私の口の中の唾液の分泌量も増えてくる。だからといって、レモンが特殊なわけではない。チョコレートの甘さの体験のような、より刺激が少ない味覚体験についても同じである。他人が食べているチョコレートの甘さを想像するとき、やはり私は自分の口の中に甘さが広がる様を想像してしまう。他人の味覚体験を想像することが、他人がその口の中に甘さや辛さを感じている状況を想像することであるとするならば、私には他人の味覚体験を想像することができない。

私は、他人の口の中に甘さが広がって行く様を想像することができないだけではない。私には、たとえば、自分の右手の掌で甘さを感じている様を想像することもできない。右の掌の上のチョコレートの触感を想像することならば私にもできる。右手にひんやりとした、角ばった物体が触れるのが感じられるのである。また、掌の上にチョコレートの触感が生じると同時に口の中に甘さの感覚が広がって行くということも想像することができる。しかし、掌の上に甘さの感覚が広がって行く様を想像することは私にはできない。私には、自分の舌以外の場所で味を感じることができないだけではなく、自分の舌以外の場所で味を感じているところを想像することもできないのである。

痛みの想像についても同じことが言えるように思われる。他人の腹痛を想像しようとしても、自分が他人の腹に痛みを感じていることの想像になってしまうと言われる。しかし、本当に他人の腹に自分が痛みを感じている様子を想像することができる人がいるだろうか。

たとえば、野矢茂樹はウィトゲンシュタインの一節を次のように敷衍している。まず自分の腹に痛みがあると想像し、次に目の前にある紙の上に痛みが移動したと想像する。腹から指先へ痛みが移動し、それが指から紙の上に移って行くのである。ついで、紙の上の痛みが目の前にいる他人の腹へと移るところを想像する。この時点で、私は目の前の他人の腹に自分が痛みを感じているところを想像していることになる。そして最後に他人の腹に、私ではなくその人自身が痛みを感じていることを想像すれば、他人の腹痛の想像が完了することになるはずであるが、野矢によれば、この最後の段階で皆挫折する。他人の腹に痛みを想像したとすれば、それは他人ではなく、私自身が他人の腹に痛みを感じていることの想像になってしまうからである（野矢、1999、10～11 頁）。

野矢と違って、私には、そもそも目の前の紙の上に私が痛みを感じているということを想像することができない。腹にあった痛みが上昇を始め、右肩を経由して右手人差し指の先へ移動した、というところまでなら私にも想像ができる。しかし、その痛みが指の向こうの紙へ移動するとはどのようなことなのだろうか。私は指先で紙に触れてみる。指先にある紙に私が痛みを感じているとはどのようなことなのだろうか。

野矢が言う紙とは、私が触れているものとしての紙ではなく、私に見えているものとしての紙、視覚的に現れた限りにおける紙のことなのだろう。私が感じている痛みの場所と視覚風景における紙の場所、あるいは他人の腹の場所が対応するという事態ならば、あるいは考えることができるかもしれない。しかし、それは私が紙や他人の腹に痛みを感じていることを想像することではない。

たとえば、視覚風景と聴覚風景の間の再編成はしばしば生じる。スクリーンの両側にスピーカーがある場合、声はスクリーン上の人物の口から出ているように聞こえるが、スピーカーを私の背中の側へ持ってきても、しばらくすると違和感はなくなり、やはりスクリーンの上の口から声が聞こえてくる。

視覚と触覚の間にも次のようなことが起こりうるかもしれない。鼻の頭を爪で引っ掻いてみると、爪の感触は、目のすぐ下に見える鼻の先に感じられる。目の前に鏡を持ってきて同じ動作を続けてみよう。やがて、爪に引っ掻かれている感覚とそれに伴う痛みが鏡の中の鼻先に感じられるように思われてくるだろう。鏡の中の風景と触覚風景の融合が生じたのである。ここで、鏡のかわりに、私の動作を模倣する人物が私の前に現われたならば、私には、視覚風景におけるその人の鼻先に痛みを感じるように思われてくるかもしれない。そのとき、私は本当に私の鼻の頭ではなく他人の鼻の頭に痛みを感じたことになるのだろうか。そうではないだろう。私はずっと自分の鼻に痛みを感じ続けている。私は痛む鼻をもう一方の手でなでてみることもできるが、そのとき私の手が触れているのは他人の鼻ではなく、自分の鼻である。その手を正面に見える鼻に伸ばし、それをつまんでみても、自分の鼻には何も感じられはしないだろう。目を閉じると視覚風景は消えるが、依然として痛みは続く。目を閉じた瞬間に、痛みの場所が他人の鼻から自分の鼻へ移動したりはしない。私の前に私の動作を模倣する他人が現れた場合に生じるのは、私の鼻から他人の鼻への痛みの場所の移動ではなく、触覚風景における私の鼻と視覚風景の中の他人の鼻の一時的な融合である。

私は、私の身体以外の場所に痛みを感じている状況を想像することができないだけではない。私は私の架空の身体部位に痛みが生じているところを想像することもできない。目覚めてみたら私に尻尾や角が生えていたということならば想像することができる。朝、顔を洗いに洗面所へ行くと、鏡に私の額から角が伸びているのが見え、合わせ鏡をしてみると、細長い、あるいは丸い尻尾が見えるのである。また、左手で角や尻尾を触ってみているところも想像することができる。私の左の掌に、角や尻尾のつるつるした、あるいはふかふかした感触が感じられるのである。しかし、左手によって触れられている尻尾に左手の生温かい感触が生じているところを想像することは私にはできない。尻尾に神経が通じているならば、尻尾にも左手の存在が感じられるはずであるし、痛みも生じるはずである。しかし、左手が架空の尻尾をつかんだり、尻尾をひねったりするときに左手に生じる感覚を想像することはできても、私が架空の尻尾で左手の掌を感じたり、架空の尻尾に痛みを感じたりしているところを想像することは私にはできない。それは、痛みや触感を想像するとき、私は、想像された私の身体に痛みや触感が生じていることを想像するのではなく、本物の私の身体に痛みや触感が生じていることを想像するからである。味覚の場合もそうである。甘さや辛さを想像するとき、私は、架空の舌に甘さや辛さが広がって行くところを想像しているのではなく、現実の私の舌に甘さや辛さが広がって行くところを想像しているのである。

私は、常日頃、自分の額の存在や背中の存在を意識してはいない。また、手を握り締めたり、何かに触れたり、指を動かしたりしているときでもない限り、自分の手に5本の指が付いているということに気づくこともない。しかし、私は、そこに何の感覚も生じていないにもかかわらず、目を閉じたまま、額の真中や背中の真ん中に注意を向けることができる。注意を向けた場所にペン先で触れてみようとすれば、私は、ペン先が的を射たか的を外したか、どれだけ的から外れているか、目を閉じたままでも判断することができる。また、私は小指を立てることもできるし親指を動かすこともできる。針の穴に糸を通し損ねることがあるように、箸でご飯を口へ運ぼうとしたら鼻に入ってしまい、「今日はコントロールが悪いな」と反省する、という

ことならあるかもしれない。しかし、親指を動かそうとしたら人差し指が動いたり耳が動いたりした、などということはないし、人差し指の動かし方と親指の動かし方の違いが分からなくなった、などということもない。痛みが生じたら、それが体のどの部位に生じたのか、大体の見当がつく。それは、私がいつも自分の身体図式、あるいは身体像と一緒に生きているからである。そして、私が痛みを想像するとき、私はこの身体像の上に架空の痛みを思い描いているのである。こうして、私は、右足の甲や額の真中や左の奥歯の存在を感じていないにもかかわらず、そこに痛みが生じていると想像することができる。痛みの想像にとって、私の身体像が不可欠であるゆえに、私は私の現実の身体以外の場所に痛みを感じているということを想像することができないのである。

こうした制約は、実は、視覚体験の想像にも存在する。360 度を見渡せる眼を持った人間が存在することは可能なことだっただろう。頭のてっぺんから触角のようなものが生えていて、その先に、四方からの光を受け取ることができる球形の眼が付いているような人間がいれば、その人間には死角というものがなくなるだろう。ところで、私が、眠っている間にそのような眼を植え付けられ、暗闇の中で目覚めたとしたら、自分が 360 度見えるようになったことに私は気が付くだろうか。それとも、私は夜が明けるまで自分の視野の変化に気づくことはないのだろうか。私が暗闇で眼を見開いているとき、私には何も見えていないのだろうか、あるいは暗闇が見えているのだろうか。暗闇の中で眼を開いている私に暗闇が見えているのならば、私は暗闇の中でも自分の身に生じた変化に気が付くことだろう。

しかし、私がそのような眼を持つことは可能であるように思われるにもかかわらず、私には自分がその眼を持ったときに世界がどのように見えるのか想像することができない[1]。夜中に目覚めた私の前――球形の眼そのものには前も後ろもないので、目の前ではなく顔の前、つまり、胸の前ということであるが――で白い光が光ったとしよう。その光は私にはどのように見えるのだろうか。四方を見渡せる私の視野には中心というものがないはずであるが、私は中心を持たない視野の一点に光が見えるとはどのようなことであるのか想像ができない。何かを視覚的に想像するときに、私は、その何かを視野の真ん中か、上下左右どこかの位置に見えるものとして想像してしまう。現実の視覚風景だけではなく、想像上の視覚風景にも、必ず中心と上下左右があるように思われる。

暗闇の中の光が動き出し、私の周りを一周して元の場所に戻るとしよう。その光は私にどのように見えるのだろうか。光を視野の中心に思い描いたとしよう。光は右方向へと移動を始め、視野の右端へ到達する。私の想像力はそこで尽きてしまう。光が私の背中側へまわったときの光の見えを私はどうしても想像することができない。強いてやってみようとしても、後頭部に意識を集中しながら、光が目の前で楕円軌道を描く姿を想像する、ということができるだけである。目覚めたときの視覚風景の想像となると全くのお手上げである。これも無理にやってみようとすれば、日本の世界地図では、南北アメリカ大陸とヨーロッパ・アフリカが離れ離れになっているように、風景が私の背後で切り離され、私の前方へと収縮した姿で思い描くか、あるいは、透明な地球儀を見るように、私の前方に、素透しの背中側の風景と前方の風景が、重なって見えている姿で思い描くしかない。私は背後の風景を思い描くことができないわけではない。いま自分の背中側にどのような風景が広がっているか想像するのは容易である。私にで

きないのは、背後の風景が背後に見えているところを思い描くことである。

痛みの想像において身体像が果たす役割を視覚の想像において果たしているものを、とりあえず「目」と呼ぶことにしよう。目と言っても、手で触れることができ、鏡に映してみることができる物理的な眼のことではない。身体を見たり身体に触れたりすることはできても、身体像について、それを見たりそれに触れたりすることはできない。同じように、目に触れたり目を見たりすることはできない。ここで言うところの目とは、写生の時間に「目に映るものを正確に描きなさい」と言われるときの目のことである。目には日中は色とりどりの光景が、夜中には暗闇が、瞼を閉じたときには瞼の裏側が映し出されている。そして、視覚風景を想像するとき、私は、想像された目に映る風景を描くのではなく、現実の目をカンヴァスにして、その上に、あるいはその前に想像上の風景を描くのである。だから私の現実の視野と同様に、私の想像上の視野も限定されているのであり、また、私の背後の風景を見ることができないように、背後に見える風景を想像することもできないのである。

私は、先程思い描いた富士山の像を倒立させることができる。そのとき、富士山は何に対して倒立したのだろうか。前を走る新幹線に対してだろうか。しかし、新幹線もろともさかさまになった富士山を思い描くことも容易にできる。ところで、上下を逆転させる逆転メガネをかけたときになぜ風景が倒立して見えるのだろうか、と問われることがある。風景の一部ではなく、目に見える風景全部がひっくり返ったのならば、なぜひっくり返ったとわかるのだろうか。身体運動における上下方向と視覚風景の乖離が生じたからだろうか。そうではないはずである。眼や顔を動かすことがなくとも、メガネを着用した人には世界が瞬時に逆転して見えるだろう。何よりも私は想像上の風景を自由に回転させることができる。先程の富士山を左側に傾けることもできるし、右下 45 度に傾けることもできる。私は何に対して富士山の角度を変えたのか、と聞かれれば、目に対して、と答える以外にはないように思われる。右の奥歯に痛みを想像し、次いで左の奥歯に痛みを想像するときや、背中に熱したT字型の金属を押しあてられたときの灼熱感を想像し、次いで同じ型の金属を逆さに押し当てられた場合の感覚を想像するときと同じようなことを、私は視覚風景の想像において行っているのである。だとすれば、身体像と同様に、目にも固有の座標があるのであり、逆転メガネを着用したときには実物の像が、想像上の富士山の場合には想像された像が、座標上の位置を転回させたのである。

私が視覚風景を想像するとき、目をカンヴァスとして、目に映る像を思い描いて行く、といっても、目は一種のスクリーンで、目に描いた光景の背後に心の目が控えている、というわけではもちろんない。指先の痛みを想像するとき、指先に想像された痛みを感じる心の痛覚がどこかに存在しなければならない、と考える人はいないだろう。私は指の先に痛みを想像するだけである。雪を頂いた富士山を想像するときも、私は思い描いた富士山をさらに見ているわけではない。雪を頂いた富士山を思い描いているだけである。

私が他人の腹に痛みを想像することができないように、私は他人の目の前に富士山の姿を描いて行くこともできない。しかし、私には他人の視覚体験を想像することができる。他人に見えている海の光景や富士山の姿を思い浮かべることができる。他人の視覚体験を想像することは、他人の目の前に風景を描くことではないからである。他人に富士山が見えていることを想

像するとは、私の目の前に富士山を描きながら、これと同じ風景を彼も見ているのだ、と思ってみることである。それならば、他人の腹痛を想像するとは、他人の腹に私が痛みを感じているところを想像したうえで、私を他人とすげ替えるといった芸当をすることではなく、自分の腹に痛みを想像しながら、このような体験が私の腹以外のどこかに生じているところなのだ、と思ってみることではないのだろうか。そのように思うことの、どこに意味論的な困難があるのだろうか。

Ⅱ　痛みの場所

腹痛を抱えながら、これと同じものがいまどこかで生じているかもしれない、と思ってみるとしよう。これと同じものがどこかに存在するとはどのようなことなのだろうか。たとえば、これと同じものがいま国会議事堂の中にあるとはどのようなことなのだろうか。また、間欠的に襲ってくる歯痛の合間に、あれはいまどこにいるのだろう、と思ってみることもできる。さっきまでのあれは、いま頃どこかをうろついているのだろうか。

前者は、この痛みと質的に類似した痛みがどこかに存在していると想定しているのであり、後者は、先程の痛みそのものが今もどこかに潜んでいると想定しているのである。いずれにせよ、痛みが私の身体以外の場所に存在するとはどのようなことなのだろうか。

ブロックは、痛みの場所を表すときの in は、通常の物体の空間的位置を表す場合の in とは異なった意味を持つと言い、次のような例をあげている。

The pain is in my fingertip.
The fingertip is in my mouth.
Therefore, the pain is in my mouth.

空間的な in ならば成り立つはずの上のような推論が、痛みの場合には成立しない。痛む指先を口の中に入れても、痛みが口の中にあることにはならないからである。痛みの場所を示す in は推移性を持たないということである。それに対して、タイは、痛みの in が推移性を持たないのは、痛みの場所の意味が通常の物体の場所の意味と異なるからではなく、痛みの場所についての言明が内包的な文脈を形成するからであると言う。タイによれば、ブロックの例は以下の推論と類比的なのである。

I want to be in City Hall.
City Hall is in a ghetto.
Therefore, I want to be in a ghetto. (Tye, 1995, pp.111~112)

ある人が市庁舎へ行きたいと思っていて、かつ、その市庁舎がゲットーにあるとしても、その人がゲットーへ行きたいと思っているわけではないだろう。人体の大部分は水であると信じている人が、人体の大部分は H_2O であると信じているとは限らないのとそれは同じことである。しかし、タイの解釈は、彼の痛みについての表象主義を別としても、明らかに誤っている。内包的文脈とは無縁でありながら、場所の推移性が成り立たない、以下のような例はいくらでもあるからである。

A mole is in my fingertip.
The fingertip is in my trouser pocket.
Therefore, a mole is in my trouser pocket.

私が手をポケットに入れれば、私の手はポケットの中にあるが、私のほくろがポケットの中

にあることになるわけではない。そして、痛みのケースが市庁舎よりもほくろに近いことは言うまでもないだろう。ではなぜ私の手はポケットの中にあるのに、ほくろがポケットの中にあるという言い方は不自然なのだろうか。ほくろではなく、爪ならばどうだろうか。爪がポケットの中にあると言いうる場面があるのではないだろうか。今朝切り落とした爪がポケットの中に入り込んでしまったならば、その爪はポケットの中にあるのではないだろうか。一方、切られる前の、私の指先にくっついている爪の場合は、ポケットの中にあることはできない。手がポケットの中にあるとしても、爪は、痛みやほくろと同じように、ポケットの中にではなく指の先にあるのである。

痛みやほくろがポケットの中にあることができないのは、それらの存在が他のものに依存するからだ、と取りあえずは言っておいてよいだろう。痛みやほくろが、一人で、ポケットの中や国会議事堂の中をさまようことはできない。痛みもほくろも、常に、体の一部に付随することによってしか存在することができない。一方、爪は、指先から切り落とされても爪のままであることができる。爪を掃除機で吸い込むこともできるし、拾い集めて色を塗ることもできる。痛みやほくろはそれだけで存在することができないゆえに、何もないところに痛みやほくろだけが存在する、という想定は意味不明なのである。痛む腹を抱えながらの、これと同じものが、いま、別のところに生じているかもしれない、というつぶやきが奇妙に聞こえるのもそのためである。しかし、痛みの場所の意味とほくろの場所の意味が全く同じであるというわけではない。

右の掌にほくろがある二人が、握手をするために近づいているとしよう。それとともに、二つのほくろも近づき、やがて接触するだろう。一方、右の掌に傷を持つ別の二人も、握手をするために近づいている。二人が掌に痛みを感じているとすれば、二人が痛みを感じている場所は近づき、やがて接触するだろう。しかし、二つの痛みが近づき、接触するわけではない。私の左肩の痛みと左の指先の痛みが移動を始め、左ひじあたりで融合するということならありうる話である。私の場合ならは、痛みの部位とともに、痛み自体が近づき、遠ざかることは可能である。しかし、他人同士の場合は、痛む部位が近づいたり離れたりくっついたりすることはあっても、痛みが近づいたり離れたりくっついたりすることはない。

私が右の掌に傷を負い、そこに痛みを感じているとしよう。私は、左手で傷に触れることもできるし、傷を見ることもできる。そのとき私は、痛みが生じている場所に触れ、痛む場所を見ているのであるが、痛みに触れ、痛みを見ているわけではない。たとえそれが自分の痛みでも、痛みに触れたり、痛みを見たりすることはできない。左手で傷口に触れたとき、左手と痛みは同じ場所を占めている、と言うこともできない。痛みに触れたり痛みを見たりすることができないのは、痛みが物理的状態ではなく心的状態だからなのだろうか。では、なぜ心的状態が右の掌に存在したり、右の掌に生じたりすることができるのだろうか。右の掌に痛みが生じている、あるいは右の掌が痛い、とはいったいどのようなことなのだろうか。

私の右の掌の傷は様々な仕方で私に姿を現す。傷へ視線を向ければ、傷は視覚的に現れ、左手で傷に触れれば、傷は触覚的に現れる。そして、傷は、痛覚的には痛みとなって現れる。それでは、傷の痛みはどこに現われるのだろうか。それは、いま、目の前に見えているあの傷のある場所ではない。痛みは視覚風景のどこかに現われるわけではない。痛みは、私の身体像におい

て右の掌が占める場所に現れるのである。痛みが身体像の上に現われるものであるゆえ、自分の痛みだけは、身体像の座標上を近づいたり離れたりすることができるのである。

傷を見ながら、「ここに痛みがあるのだ」と言ったとしても、それは文字通りに受け取られてはならない。視覚風景の「ここ」は、身体像における痛みの場所を指してはいない。ここに見える傷が痛むとは、ここに見える傷が痛みとしても現れている、ということであり、同一の傷が、一方ではここに見え、他方では、この痛みとして感じられている、ということである。また、注意の対象を掌の視覚像から痛みへ移動させることによって、「ここに掌の傷が見えているのだ」と思ってみることも、あるいはできるかもしれない。身体像において掌が占める部分に意識を集中しながら、「私はいまここを見ているのだ」、と思ってみるのである。しかし、これはかなり奇妙に聞こえることだろう。むしろ、「私はいまこれを見ているのだ」と言うべきなのだろう。私は、正確には、私に痛みをもたらしているこの傷が、いま私の視野の中心を占めている、と言いたいのである。

私は、傷に触れることはできるが、傷の視覚的現われである傷の見えに触れることはできない。また、私は傷を見ることはできるが、傷の触覚的現われである私の左手に感じられる傷の感触を見ることはできない。物ならば、私は見ることも触れることもできるし、場合によってはその音を聞いたり、においや味を感じたりすることもできる。しかし、物の知覚器官を通しての現れである色や味やにおいをさらに知覚することは私にはできない。そのような高次の知覚器官は私には備わってはいないからである。そして、痛みを見たり、痛みに触れたりすることができないのも、痛みが物ではなく、私に対する傷の現れだからである。

身体の部位に痛みが生じることと、物体の特定の場所に物理的出来事が生じることは、したがって、似て非なるものである。痛みは、傷の状態でもなければ、傷ついた組織の内部で生じている何事かでもない。原子炉内で核分裂反応が生じたり、フィリピン沖で台風が発生するように、腹や掌に痛みが生じるわけではないのである。

私は、今度は、他人の掌の傷を見ながら、ここに痛みが生じているのだ、と思ってみることにする。また、他人の傷に触れながら、ここに痛みが生じているのだ、と思ってみる。私は何をそのとき思っているのだろうか。傷が痛むとは、傷が痛みとして姿を現すということであるならば、私はそのとき、正確には、この傷が痛みとして姿を現しているはずである、と思っているのである。それでは、どこに、あるいは何に、それは姿を現しているのだろうか。もちろん、それは他人である。目の前の傷は他人の痛覚には痛みとして姿を現しているのである。それが、他人が掌に痛みを感じているということである。傷がそのもとに痛みとして姿を現すところの他人とは、痛みの主体（subject）としての他人であり、他人の心（mind）、あるいは自己（self）と言われるものに他ならないだろう。他人の痛みの想像には、私の身体とは別の、傷ついた他人の身体の存在とともに、傷ついた部位が痛みとして現れる痛みの主体の存在の想定が不可欠なのである[2]。

Ⅲ　痛みと主体

私は腹痛にうめきながら、あるいは、腹痛を想像しながら、これと同じものがいまどこかに存在しているかもしれない、と考えようとしても、自分が何を考えているのか分からず途方に暮れるだけである。また、これと同じものが目

の前の友人の腹に生じているかもしれない、とつぶやいてみても、いま自分が感じているものとは別個の腹痛について考えたことにはならない。そのように考えることが、友人の腹痛ではなく、自分が友人の腹に痛みを感じている様を想像することにしかならないからではない。私にはそのような想像をすることはできない。そうではなく、あそこに見える腹に、文字どおりの意味で腹痛が生じることはありえないからである。本当の意味で他人の痛みを想像するためには、私は自分の腹痛を想像しながら、これと同じような痛みが他人に現れているのだ、と考えるのでなければならない。

では、いま私の腹に生じている痛み、また、以前私が腹に感じた痛みと同じような痛みを、いま誰かが感じているかもしれない、こう考えることに何らかの問題が含まれているだろうか。ウィトゲンシュタインや大森ならば、知覚や感覚の主体など存在しない、と言うかもしれない。また、私に感じられる痛みが痛みの範型なのだから、他の主体がたとえ存在するとしても、他の主体に痛みがあるという想定には意味を与えることはできない、と言われるかもしれない。ここでは主体の存在の問題には立ち入らない。後者の問題だけを考えておくことにしたい[3]。

他人の痛みではなく、他人の喜びや悲しみならば、私はそれを想像することができるだろうか。知覚や感覚とは違って、喜びや悲しみのような感情に特有の器官というものは存在しない。したがって、私が他人の喜びや悲しみを想像しようとするときに、自分の身体を媒介にしなければならないということはない。悲しみにもさまざまな色合いの悲しみがあることだろうが、たとえば、子供を失った親の悲しみを想像してみることにしよう。そのとき、私にできることは、親の立場に我が身を置いてみることである。自分に子供がいる状況を想像し、子供の性別と年齢、子供が亡くなった状況も想像する。そのように、想像力をたくましくして行くうちに、自分のうちに悲しみの感情が込み上げてくるかもしれない。そのとき、私は子供を失った親の悲しみを想像することに成功したのであり、子供を失った親の悲しみを理解したのである。また、どのようにしても悲しみが湧いてこなければ、私にはその親に特有の悲しみを想像することができなかったのである。他人の喜びや怒りを想像するときにも私は同じようなことをするだろう。自らを、喜んでいる、あるいは怒っている他人の状況に移し入れることによって、私は、怒りや喜びが込み上げてくるのを待つ。怒りや喜びが私のうちに生じたならば、私は他人の喜びや怒りを想像することができたのであり、他人の喜びや悲しみを我がことのように感じることができたのである。

他人の喜びや悲しみを想像するとは、他人の中に喜びや悲しみを想像することではない。他人の腹痛や歯痛の想像ならば、他人の腹や他人の歯のような、他人の中に痛みを帰属させるための手がかりが、一見したところはあるように思われる。しかし、喜びや悲しみにはそのようなものは何もない。だから、他人の中に喜びや悲しみを想像するという道は、私には端から閉ざされている。他人の喜びや悲しみを想像するとは、自らのうちに喜びや悲しみを生みだすことである。そして、自分のうちに生じた喜びや悲しみによって、私は他人の喜びや悲しみを知るのである。

独我論的傾向の強い人は、ここでもまた、悲しみの範型は自分に感じられるあの独特の感情なのであるから、他人の悲しみを想像することは不可能であり、他人の悲しみとは意味不明な表現なのだ、と言うのだろうか。しかし、私は子供を失った親の悲しみを自ら体験したことはない。子供を失った親の悲しみというものが存

在するとすれば、それが他人に感じられた悲しみであるということは、私にとって、疑念の余地のない端的な事実である。それとも、私が独我論者ならば、私のうちに湧きあがってくる悲しみを前にして、「このようなものを他人が抱くとはとても考えられない、これは私だけが感じることができるものなのだから」とつぶやくのだろうか。

痛みについても同じようなケースがありうるように思われる。私がこれまで一度も歯医者にかかったことがなかったとしよう。ある日、虫歯が痛み出して、私はとうとう近所の歯医者へ行く決心をした。予約を入れる前に、私は友人に、歯医者とはどのようなところか詳しく聞くことにした。友人は私に教えてくれる。背もたれが倒れる椅子に座らされ、目隠しをされること。歯を削るドリルの音が歯に触れると一段と甲高くなり、水しぶきが飛び、振動が口中に伝わること。そして、ドリルの先端が神経に触れると、身も竦むような、熱感を伴ったような痛みが生じること。私は恐る恐る歯医者へ行ってみる。そして、私は椅子に座らされ、目隠しをされる。ドリルのスイッチが入り、歯を削り始め、ついに、あのドリルが神経に触れたときの痛みがやってくる。そのとき、私は、これがさっき友達が話していた痛みなのだ、と思うことだろう。また、歯医者にかかった人は皆この痛みを体験したのだ、とも思うだろう。この歯を削られるときに特有の痛みは、これまでだれもが体験してきた痛みなのだ、と考えることに何か哲学的な困難が潜んでいるようには私には思われないだろう。

歯の神経の痛みのような特定の痛みではなく、痛み一般ならばどうだろうか。私が無痛覚症であったと仮定しよう。私は生まれてこのかた痛みと言われるものを体験したことがない。「痛み」と呼ばれる感覚が存在することは私も知っている。それが、蜂に刺されたり、足を踏まれたり、骨折したり、風邪をひいたり、食べ過ぎたり、投球練習をしすぎたりすると、体の特定の場所に生じるとても不快な感覚であり、それを感じた人は、思わず「痛い」と叫んだり、うめいたり、顔をしかめたり、蜂を追い払ったりし、それを和らげるために、薬を飲んだり、湿布をしたり、病院へ行ったりするものなのだ、ということも皆から聞かされて知っている。こうした痛みの機能的特徴を私は知っているが、痛みを感じるとはどのようなことかを私は知らない。いわゆる痛みのクオリアを私は知らないのである。

私は痛みと呼ばれるものがどのようなものか知りたくて、無痛覚症の治療を受けることにした。治療の結果、幸運にも私の無痛覚症が治ったとしよう。私は病院からの帰り、満員電車の車内で足を踏まれる。そして、思わず「痛い」と叫ぶということはなかったものの、うめき声が私の口から洩れ、私は足を踏んだ乗客をにらみつける。その瞬間、私は気づく。これが痛みというものなのだ。これが、皆が嫌がり、何とかして避けようとしていた、そして、私だけがなぜかこれまで免れていた、例の痛みなのだ。このことに思い至った私は、このような不愉快な感覚に耐えて生きてきた人類の我慢強さに敬服すると同時に、これからこの不快な存在と付き合って行かなければならないことを思い、暗澹たる気分に落ち込んで行く。

いや、これは痛みなどではない。これが、皆が痛みと呼んでいるものが生じるような状況で生じ、皆が痛みと呼んでいるものが引き起こすとされている反応を私に引き起こしたことは確かである。でも、これはあまりにも独特なものだ。これほどまでに独特なものが、私以外の人間に生じるとは考えられない。これはこの私だけに生じるものなのだ。きっと、皆が痛みと呼

んでいるものはこれとは似ても似つかない何かなのだ。私が独我論者ならば、そのとき私はこのように考えるのだろうか。

私がそのように考えることはありそうにない。無痛覚症の私にとって、痛みとは、それがどのような質感のものであれ、正常な人間ならばだれでもが一定の状況下で感じる感覚なのであり、痛覚を回復した私にそのような状況下で生じた感覚は痛み以外のものではありえないからである。確かに、足を踏まれたときに私に生じたあの感覚が、他の人たちが足を踏まれたときに感じる感覚と同じ質のものかどうかは私にはわからない。スペクトラムの反転が可能に思われるのと同じように、同じ種類の刺激に対して、人ごとに異なった質の感覚が生じることはありうることのように思われる。また、本当は他人は足を踏まれても何も感じていないのかもしれない。痛みのクオリアなど存在しないのかもしれない。心を持つのは、やはり私だけなのかもしれない。このような、他人の心に関する古典的な懐疑はどこまでも残り続けることだろう。しかし、足を踏まれたときに私が初めて体験したあの感覚は、私だけに生じることができる種類のものである、ということが、その本質的な特性としてあの感覚体験に含まれているようには私には思われないだろう。

無痛覚症が治癒した私は、痛みと呼ばれるものを体験することによって、自分の感覚世界が拡張したことを実感することだろうが、それだけではない。私はこれまで、デッドボールを受けたバッターが、なぜ顔をしかめてうずくまり、そして、ときにはバットを持って鬼のような形相でピッチャーへ詰めより、ピッチャーを威嚇するのか全く理解できなかった。しかし、いまはバッターの気持ちがよくわかる。バッターはあのときこれを感じていたのだ。こうして、悲しみの情が私のうちに湧いてくることによって、私が他人の悲しみを理解することができたのと同じように、痛覚を回復することによって、私は他人の感覚世界の可能性についての新たな知識を獲得し、他人の行動について、より深く、自分のことのように理解できるようになるのである。

初めて歯医者に行った人の場合と同じように、無痛覚症から回復した人が、足を踏まれたときに生じる独特の感覚を初体験したときに、これが周りの人たちが痛みと呼び、忌み嫌っていた感覚なのだ、と思うことに、何か不可解なところがあるようには思えないだろう。それならば、実際には無痛覚症ではない私が、この痛みと同じような痛みを感じている人がどこかにいるかもしれない、と考えることのどこに謎めいたところが潜んでいるというのだろうか。

「痛み」があらゆる人に適用可能でなければならないということは、無痛覚症という特殊な状況の想定を待つまでもなく、明らかなことである。「痛み」という語を、私が自分の痛み体験を通して学んだのは事実であるが、私は、痛みは誰にでも生じる感覚なのだということも同時に学んでいるからである。痛みやかゆみなどの感覚概念は、あらゆる主体に適用されうるものでなければならないのである。

それでもやはり、痛みを感じることができるのはこの私だけなのだ、という思いは残るだろうか。主体や自己と言われるものの存在を信じない、ヒューム的人間ならばそのように思うことだろう。そうでなければ、その思いは、他人の痛みを感じることはできないという、痛みについての文法的事実に由来するのだろう。私に感じられないものがどうして痛みの名に値しようか。しかし、私に感じることができないものを感じることができる人がいることには何の矛盾もない。友人が昨夜から悩まされている歯痛を私は感じることはできないが、私にも同じよ

うな歯痛が生じることはありうるのである。昔ながらの他我認識の問題に加えて、他人の体験の意味に関する問題が存在するようには私には思えない。意味論的他我問題とは意味が不明な問題なのではないだろうか。

注

1　大森によれば、360 度の風景を想像するのは比較的容易である（大森、1981、p. 154）。プラネタリウムなどのドームを想像的に拡張すればよいのである。しかし、私にはドームの内部に張り付いた風景が、全方位的目にどのように見えるのか、やはり想像できない。

2　ピーコックは、痛みの概念を獲得するには私以外の主体の想定が不可欠であると言う（Peacocke, 2008, Chap. 5）。ピーコックによれば、他人が痛みを感じているとは、私と同じ種に属する私とは別の主体が、私が痛みを感じているときと同じ状態にあることである。

3　意識と主体の問題については、星野（2010）を参照されたい。ヒューム的な無主体論者にとっての他我問題については、Kripke（1982, Postscript）に的確な分析がある。

文献表

星野　徹（2010）、「意識、自己、実体」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 46 巻　第 1 号。

Kripke, S. A. (1982), *Wittgenstein on Rules and Private Language,* Harvard University Press.（『ウィトゲンシュタインのパラドックス』、黒崎　宏訳、産業図書）

野矢茂樹（1999）、『哲学・航海日誌』、春秋社。

大森荘蔵（1981）、『流れとよどみ』、産業図書。

大森荘蔵（1992）、『時間と自我』、青土社。

Peacocke, C. (2008), *Truly Understood*, Oxford University Press.

Tye, M. (1995), *Ten Problems of Consciousness*, The MIT press.

L・ウィトゲンシュタイン（1976）、『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集８、藤本隆志訳、大修館書店。